

きのこ

1 ダニの防除対策

ダニ類は虫体が小さいため肉眼で判別、発見することは難しい害虫です。雌は1日に10数個の卵を産み、卵は7～10日程度の短期間で成虫になるため、発見の遅れは甚大な被害となる場合があります。

ブナシメジでの主な被害は、培養・熟成期にビン内に侵入して菌床の食害、また、ダニに付着した害菌がビン内に運びこまれることによる害菌汚染であり、特に大きな問題となります。

害菌の発生は接種後から約10日間、ビン内へのダニの侵入を防げばほとんど抑えられます。また、トリコデルマ等の害菌に汚染されたビンを見つけた場合はダニの侵入を疑い、被害を拡大させないように早急に対策することが重要です。

(1) 生態

被害を及ぼすダニ類は、貯蔵食品や家畜飼料を食害する害虫ですが、培地等でも容易に繁殖します。

1) コナダニ科 (ケナガコナダニ)

体色は乳白色、体長は0.4mm前後で肉眼では白い粉状に見える。歩行移動が中心で、パレットや床に近い培養ビンにおいて害菌汚染が多く見られる。

2) ヒナダニ科 (サジボウヒナダニ)

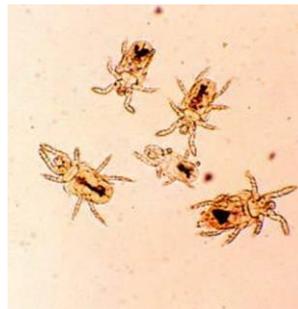
体色はオレンジ～褐色、体長は0.2～0.3mm前後とやや小型で、個体が集合したときはオレンジ色～赤褐色に見える。ネズミ、昆虫や風によって移動する。

3) ホコリダニ科 (ナミホコリダニ)

体色は乳白色、長卵形、体長は0.15～0.2mm前後でヒナダニより小型で、移動能力は他のダニより劣る。主に風に飛ばされたり、落下したりして移動している。



<ケナガコナダニ>



<サジボウヒナダニ>



<ナミホコリダニ>

(2) 予防対策 (通常時)

- ・トリコデルマ等の害菌汚染ビンを発見した場合は直ちに抜き取り、殺菌釜で殺菌して掻き出す。
- ・パレットは殺菌釜で殺菌してから使用する。
- ・割れビンの廃棄、及びキャップのウレタンが硬化したものは交換する。
- ・培地混合の際は、飛散する粉塵を施設内に広げないよう、カーテン等の間仕切りや覆いを設置するとともに、施設内の培地くずや埃(ほこり)などは、こまめに清掃するようにする。
- ・施設内に動物や虫を入れないようにする (鳥の巣はダニの温床となるので除去する)。

- ・培養室内の環境は、温度はブナシメジ栽培では 22℃以下に保つことを基本とし、空気の循環を確保するとともに、湿度は原則として、65%前後に保つ。

(3) 被害確認後の対策

- ・早急に汚染ビンを拾い出し、殺菌釜で殺菌・殺虫処理する。
- ・パレットを殺菌処理する。
- ・室内の湿度を 70%以下に下げ、ダニに不適な環境とする。
- ・培養室は次亜塩素酸等を用いて拭き掃除を行う。
- ・接種後はコンテナごとポリマルチで被覆し 10 日間程静置する(写真)。また、出来るだけ清潔な部屋で 10 日前後培養した後、通常の培養室へ移動する。
- ・接種直後の培地は風の当たらない所へ置き、風下には置かない。
- ・被害発生場所から汚染されていない場所への移動は避ける。
- ・人や靴、フォークリフトのタイヤ等へのダニの付着に注意する。



2 台風等接近にともなう対応

台風等接近した場合に、停電の発生、周辺部からの施設内への雨水等の流入などのリスクが想定されます。発生時の対応について、日頃から確認しておきましょう。

(1) 停電が発生した場合

- ・停電が発生し室温と外気温の差が大きい場合は、短時間であればドアの開閉を控える。
- ・停電が長時間にわたる場合は、施設内の温度上昇に留意して適宜、換気を行う。

(2) 施設内に冠水・浸水した場合

- ・電気設備は、起動前に十分な点検を行い、漏電事故が発生しないよう注意する。
- ・収穫できるものは、早めに収穫、包装する。
- ・生育中、水がかかった生産物は速やかに施設外へ搬出し、処分する。
- ・室内の浄化を図るため、施設を空にして水で泥等を洗浄する。
- ・洗浄後は、除菌剤を散布し、乾燥させる。なお、除菌剤散布後は、十分換気してから培養基を搬入する。(直後の搬入は避ける。)